

巻頭言

篠原 資明

とうとう名物教授が京都大学を停年で去ることになった。岡田温司くん、キミのいない京都大学の風景は、ずいぶん寂しくなることだろう。キミのような大学者を、いつまでもくん付けで呼べるのは、ボクが京大文学部の美学美術史学研究室で少しばかり先輩だったおかげであり、この幸運を、ボクはいつまでも手放したくないと思う。

学部生のころから、キミはイタリア美術を熱心に研究していた。ゼミでポッティチェリについて発表したとき、だれも理解してくれなかったと、文学部の図書室で泣いていたという。そんなことまで、当時から語りぐさだった。かと思うと、美術史学会にホットパンツにハイソックスで現れるなど、そのオシャレぶりも、早くから評判だった。

亡き若桑みどりさんが、人間はイタリアが好きか嫌いかで、2種類に区別されるといっていたが、キミくらいイタリア愛に生きてきた人は、思いうかばない。ただ、イタリア愛といっても、けっして偏狭なものではなく、イタリア以外のさまざまな文化と思想におおらかに開かれたものだった。キミが積み上げてきた驚くほどの業績の広がりも、そこから来る。

キミの学風について、ボクにどれほど語る資格があるかどうか、心もとないかぎりだが、たとえば美術作品について、あくまで生の現実からとらえ直そうとする姿勢に貫かれているように思う。イタリアの哲学者、アガンベンへの共感も、そのような姿勢と無縁ではないはずだ。イタリアをベースとしながらも、キリスト教から映画へとキミの研究は、さらに広がりを増していく。その広がりを、停年という区切りが停めることはできないだろう。

ただ、キミは自分の業績を積むことにだけ熱心な学者ではなかった。教育者としての存在感にも、圧倒的なものがあった。たとえば原書を読む訓練では、どれほど多くの学生がキミの薫陶に浴したかしのれない。そういった学生たちが、日本の学問を熱く支えてくれることを、ボクは信じて疑わない。